

フキの組織培養で優良系統を選抜

淡路地域の特産物であるフキは、農業者が株分けで種苗を生産、維持しており、長年の栽培によりウイルス病に罹り生産性が低下している。そこで、組織培養によりウイルスフリー化するとともに、ウイルスフリー化に伴い得られた優良な変異系統4系統を現地試作し、特に収量性や増殖性などの優れた系統を選抜した。

内 容

現地から収集した株を用いて、直径約0.5mmの茎頂組織や未熟な頭花を培養し、ウイルスフリー苗を11系統(271個体)作出した。

まず、それらのウイルスフリー苗を現地の原種増殖用隔離施設に定植し、収量性、葉柄の伸長性、増殖性から4系統を選抜した。

選抜した4系統は、農家の現地ほ場においてさらにその形質を調査した。

定植のための種苗は、親株から発生したランナーの先端が新たな株となった部分(表中:定植部位の「株苗」)や、ランナーの途中に存在する節の部分(表中:定植部位の「ランナー苗」)を用いる。現地では、「株苗」の方が、その後の萌芽性等が優れているとされている。系統Dは「株苗」の発生数、苗当たりの萌芽数ともに優れていた。

収量調査は1月、3月、5月の3回行い、1月に地上部の茎葉をすべて刈り取り収穫し、その後再生した地上部を、同様に3月、5月にも収穫した。3回の収量を合計すると系統Aが最も多く、次いで系



収量調査時のフキほ場

統Dとなった。今回の試験では、収量性は系統Aが優れていたが、種苗の増殖・収量を総合すると系統Dが最も優れていた。

今後の方針

生産物の日持ち性等の検討も行い、生産者団体とも協議の上、1系統に絞り込む。

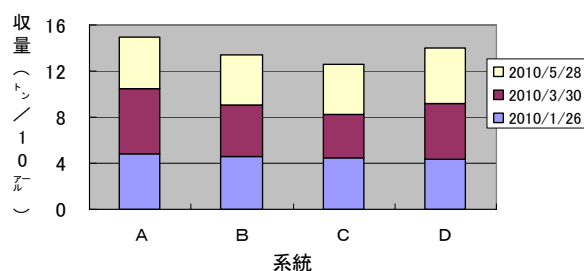
これらはウイルスフリー苗として、種苗の増殖段階から一般ほ場への定植の直前まで隔離して維持する必要がある。産地内に共同育苗施設として隔離施設を設置して、アブラムシの飛び込みがないよう、確実に管理する。

山元 義久 (農産園芸部)

(問い合わせ先 電話: 0790-47-2414)

系統	定植部位	定植数 ¹⁾	萌芽数	萌芽数/苗
A	株苗	40	116	2.90
	ランナー苗	183	131	0.72
B	株苗	37	124	3.35
	ランナー苗	147	130	0.88
C	株苗	38	117	3.08
	ランナー苗	185	167	0.90
D	株苗	48	169	3.52
	ランナー苗	127	133	1.05

注1)親株5個体から採苗し、すべてを定植した。



フキ培養系統の収量調査結果